

[第4回]



スコットランド国際開発庁 対内投資グローバルヘッド(在東京)

スティーブン・ベーカー 氏

あなたの知らないスコットランド ～イノベーションにあふれる国～

スコットランドと聞いて、あなたは何を思い出すでしょうか？スコッチウイスキー、キルト、バグパイプといったところが、一般的かもしれません。ゴルフ愛好家は、セント・アンドリュースオールドコースを思い浮かべるかもしれませんし、オカルトマニアは、ネス湖のネッシーをイメージするでしょう。

しかし、スコットランドには、多くの日本人が知らない重要な特徴があります。

それは、「自由な発想に基づくイノベーションの伝統」です。

今回は、スコットランド経済開発機関であるスコットランド国際開発庁 (Scottish Development International) の Global Head, Inward Investment で東京に拠点を置かれているスティーブン・ベーカー様から、スコットランドの特質や、スコットランドが日本企業にとって魅力的なビジネス環境である理由などについて、じっくりお話を伺いました。

スコットランド国際開発庁とは

前野 本日は、インタビューに応じただき、ありがとうございます。はじめに、スコットランド国際開発庁とはどのような組織か、また、日本オフィスは、どのような活動をなさっているのか、お教えいただけますか。

ベーカー スコットランド国際開発庁 (Scottish Development International) は、スコットランドの貿易促進及び直接投資を担う経済開発機関であり、30を超える海外拠点を有しています。主要な役割は、二つあります。第一は、スコットランドに拠点を置く企業の国際展開 (Globalisation) をサポートすることです。弊庁日本オフィスは、スコットランド企業と日本企業の橋渡しを行っています。第二は、外国企業に対し、「ヨーロッパに投資するのであれば、スコットランドは投資先として良い選択肢





となりうる」ことを示すことです。日本オフィスは、ヨーロッパへの進出に関心を抱く日本企業と接触し、スコットランドでの事業を開発するために協力しています。

前野 今、ベーカー様は、スコットランド政府とおっしゃいましたが、英国には、英国政府のほかにスコットランド政府というものがあるんですね。

ベーカー 英国はスコットランド、イングランド、ウェールズ及び北アイルランドからなる連合王国であり、地方分権（Devolution）は徐々に進んできました。1998年には、スコットランド法（Scotland Act）が成立し、スコットランド議会（Scottish Parliament）と、首席大臣（First Minister）を頂点とするスコットランド政府（The Scottish Government）が発足しました。スコットランド政府は、貿易と投資、教育、健康、インフラなど、スコットランドにとって重要な事項に関する権限（Power）を有しています。英国政府が保有しているのは、外交政策や税制などに関する権限です。「スコットランドに関する重要事項は、スコットランドの人々に任せる」というこのシステムは、うまく機能していると思います。

スコットランド政府の基本方針 ～多様性 (Diversity) と 公平性 (Fairness)～

前野 スコットランド政府のことを調べていて驚いたのですが、現在のスコットランド政府のハムザ・ユーサフ（Humza Yousaf）首席大臣は、イスラム教徒でいらっしゃるんですね。

ベーカー おっしゃるとおりです。スコットランド政府は、多様性（Diversity）を重視しており、そのことは、閣僚の半数は女性であることにも表れています。

前野 スコットランド政府は、スコットランドに関する独自の政策をつく

り、執行することもできるのですか。

ベーカー そのとおりです。例えば、スコットランド政府は、「2030年までの温室効果ガス排出量の75%削減、2045年にネットゼロ（Net Zero）を実現」することを目指すという、法的拘束力のある独自のGreen Strategyを持っています。スコットランド政府は、風力、潮力、波力に代表される豊富な天然資源を活用しながら、ネットゼロを目指しています。現時点において、全てのエネルギー供給を再生可能エネルギーだけで賄うことは不可能であり、北海油田及びガス田の生産は当面は続くでしょう。すなわち、化石燃料に依存する経済から、段階的にネットゼロ社会に移行（transition）していく、現実的な政策が必要なのです。

また、この移行の過程で、スコットランドの全ての地域が利益を受ける必要があります。特定の地域だけが利益を受けるのであってはならない、と考えています。すなわち、スコットランド政府は、公平性（Fairness）を重視しています。再生可能エネルギーについては、陸上及び海上の風力発電や、水素経済（Hydrogen Economy）の実現などに尽力しています。

スコットランド経済の現状と 日本企業にとっての ビジネスチャンス

前野 スコットランドには、エネルギー関連以外にも様々な産業があると思うのですが、その状況についてお教えてください。

ベーカー 日本の多くの皆さんは、スコットランドの特産品というと、スコッチウイスキーを思い浮かべるのではないのでしょうか。スコッチウイスキーは全世界で高評価を受けており、毎秒44ボトルが輸出されています。また、スコットランドは手つかずな自然（Pristine Nature）にも恵まれており、多くの観光名所があるほか、農畜産業は極力自然に負担を

かけない形で行われ、牛肉、サーモンなどの魚介類は人気が高いものとなっています。

特に、エンジニアリング協会の会員企業の皆様に知っていただきたいのは、スコットランドは、「ハイテク分野」でも優れた成果を生み出しているということです。それを可能にしている要因の一つが、スコットランドに所在する優れた大学です。スコットランドには19の大学（University）が存在しており、そのうち4つ（The University of St. Andrews, The University of Glasgow, The University of Aberdeen and The University of Edinburgh）は、創立が15世紀から16世紀にかけてです。ちなみに、The University of St. Andrewsは、ウィリアム皇太子とキャサリン妃が出会った大学として有名です。

これらの大学は、単に歴史が古いというだけではなく、教育及び研究の分野で多大な成果をあげています。例えば、現在、英国の大学発ベンチャー企業の約30%は、スコットランドの大学由来のものです。一般的に大学における研究は、教授の専門分野を中心に進められますが、スコットランドの大学では、産学連携や他大学との連携などが重視されます。その結果、大学発ベンチャーの数が多くなるのであり、スコットランドの大学の強さやハイテク経済の源泉である、と考えています。

人工知能（AI）と量子も得意分野です。The University of Edinburghは、1963年に人工知能に関する研究を始め、AIに関する学科を設立したのは世界で二番目でした。スコットランドの大学はハイテク分野の研究に積極的に取り組んでおり、日本企業にもスコットランドの大学や企業との連携を検討していただきたいと考えております。

前野 日本企業がスコットランドに進出すれば、ハイテク分野などに強みを有する大学との連携が可能になる、というのは大きなメリットだと

思うのですが、それ以外にも、日本企業にとってのメリットはありますか。

ベーカー インフラ面で、日本企業がスコットランドに進出するメリットは大きい、と思います。まず、物理的なネットワークとしては、スコットランドの空港及び港湾は、欧州の多くの主要都市とつながっています。次に、ソフトのインフラとして強調したいのは、金融関係です。スコットランドには、数多くの優れたAsset Managerが存在しています。彼らは、短期的な利益を追うのではなく、中長期的な視点から、企業の成長力に着目して投資を行います。日本企業にも多額の投資をしていますが、投資をする場合には、まず、企業にインタビューを行った上で、慎重に当該企業の将来性を判断し、投資を行います。その結果、スコットランドのAsset Managerは、日本のAsset Managerより優れた投資結果を生み出しています。

前野 既に、スコットランドに進出して成功を収めている日本企業がいると思うのですが、いくつか具体的にお教えいただけますか。

ベーカー まず、1972年に、寺崎電気産業株式会社がグラスゴーに進出されました。同社は、現地従業員を募集した際に、スコットランドの人々が長期安定した雇用を望むという日本人と同じメンタリティを持っていることを知り、「ビジネスのやりやすい

土地柄だ」と思ったとのことでした。英語でコミュニケーションがとれることも、立地を決める要因の一つであったそうです。また、1993年には、リビングストーン（エジンバラとグラスゴーの中間）に三菱電機株式会社が進出されました。当初ビデオレコーダーやビデオデッキを製造されていましたが、その後エアコンディショナーの製造に変更し、現在は、重要な省エネ機器の一つであるヒートポンプを製造されています。

最近では、再生可能エネルギー関連の投資が目立ってきています。大手商社の丸紅株式会社は、風力発電を中心に積極的な投資をなさっておられ、2022年1月には、英国企業及びデンマーク企業と共同で、スコットランドの東側に位置する海域にて最大設備容量3.6GWの浮体式洋上風力発電事業の開発を行うプロジェクトを落札されました。更に、伊藤忠丸紅鉄鋼株式会社は、2022年10月に、英国内15カ所に鉄鋼二次製品の加工・販売拠点を持つBarclay & Mathieson社を買収しました。今後、陸上及び海上の風力発電施設が英国内で数多く建設され、それに必要な建材の需要増が見込まれることから、これを供給するビジネスを行うことを目指しているとのことでした。

我々スコットランド国際開発庁は、スコットランドへの事業進出を希望する日本企業に対し、適切や立地場所やパートナーをご紹介します「仲人」役を果たしたいと考えてい



Dr Stephen Baker

(スティーブン・ベーカー)

2006年8月にスコットランド国際開発庁(SDI)日本事務所に入庁。前職のソニー(株)には21年間に在籍し、ストレージソリューション分野における研究開発、事業開発、営業・マーケティングといった豊富な経験を積み、バイスプレジデントも務めた。ダラム大学(英国)では、分子エレクトロニクスを研究し、博士号を取得。親日家で、趣味は合気道。アジア全体の投資ディレクターを経て、現在はグローバルヘッドとして、全世界からのスコットランドへの対内投資を統括する。

ます。また、スコットランドに進出をしようとする企業に対する助成は、英国政府とは別にスコットランド政府も行っており、ヨーロッパへ投資を考えておられる日本企業は、是非スコットランド国際開発庁にご連絡を賜りたいと思います。

スコットランドの伝統 ~The Age of Enlightenment~

前野 ここで、産業やビジネスの話 少し離れて、スコットランドの歴史や文化の話を知りたいと思います。実は、私は「英国オタク(Geek)」を自認しており、スコットランドの対イングランド独立戦争やシェイクスピアの戯曲マクベスなどを学んだのですが、ベーカー様が日本人に知ってほしい「誇るべきスコットランドの伝統、文化」はありますか。

ベーカー スコットランドには、豊かな文化と長い歴史があり、スコットランドの人々は、それを誇りに思っ



日本企業の参画が進む浮体式洋上風力発電



いる一方、他国の文化や考え方を尊重し、できるだけ知りたいと思っています。このことは、日本人も同じだと思いますし、これが、人々のつながりを強くするのだと思います。

私が、日本の皆さんにぜひ知っていただきたいのは、スコットランドにおける啓蒙時代（The Age of Enlightenment）です。これは、18世紀および19世紀初頭のスコットランドで起こった一連の人文科学・科学の発展の隆盛を指します。多くの先進的な哲学や新たな思想がスコットランドで生まれ、世界に伝播しました。フランスの哲学者ボルテールは、「文明における全ての思想を知るには、スコットランドを知らなければならない。（We look to Scotland for all our ideas of civilisation）」と言っています。当時、スコットランド以外の地域では、教会の影響が強くなり、人々は自由にもものと考えられませんでした。スコットランド人は、人間の理性の重要性、及び理性によって正当化できないあらゆる権威の拒絶を主張しました。スコットランド人だけが、革新的な考え方を持てたと言えます。

スコットランド人は、教条主義（Dogma）を嫌い、常に国際的（international）かつ外交的（outgoing）であり、どの国の人々とも率直に話し合いを行ってきました。こうした伝統は、その後も続き、スコットランド人は多くの革新的なアイデアを生み出しています。



ビジネスにも役立つという合気道

す。その結果、電球、テレビ、電話、ATMの発明にも、スコットランド人が関与しています。

日本の武道は、日常生活にとっても重要

前野 最後に、ベーカー様ご自身のお話をお聞かせいただきたいと思います。ベーカー様は、日本の武道に造詣が深いとお伺いしました。

ベーカー 私が日本の武道と出会ったのは子どもの頃で、当時、英国初の空手師範として活躍しておられた原田満祐先生（名誉大英勲章[MBE]叙勲）からお教えいただきました。原田先生からは、空手以外にも、人生において大切なことを多く学ばせていただきました。特に、「武道は、戦うためのものではなく、争いを止めるためのものである」ということは、重要な教訓でした。原田先生の空手には、合気道の要素（相手を打つことより、相手の力を利用してそらす）もあったため、日本に来てからは合気道も学びました。お教えたいただいたのは、加藤弘師範です。そこで学んだことは、習い始めは先生のやり方をまね、少しずつうまくできるようになるが、ある時、突然そのレベルが変わり、自然に体が動くようになることです。この瞬間は突然来るので、なかなか言葉で説明することは難しいのですが、この感覚を取得すると、例えば、会議で参加者がどのように考えているかが分かるようになり、マネジメントにおいても極めて役に立ちます。現在、空手は五段、合気道は六段ですが、道を究めることは一生できない、と思っています。

前野 本日は、お忙しい中、大変ありがとうございました。



インタビュー後記

私は、英国政府系の英会話学校であるBritish Counselで英国の文化や伝統を5年間ほど教わっており、英国のことは結構知っていると聞いていましたが、今回ベーカー様のお話を伺い、「スコットランドに関して知らなかったことが多いなあ」と思いました。それだけでなく、日本の武道についても、正直に言って、ベーカー様の方がよくご存じで、日本人として恥じる次第です。

インタビューの後、スコットランドのThe Age of Enlightenmentについて調べたところ、デイヴィッド・ヒューム（哲学者）、アダム・スミス（経済学者）、アダム・ファergusson（歴史家）など、数多くの「知の巨人」がスコットランド出身であることが分かりました。確かに、「誇るべき伝統」だと思います。

当協会専務理事
前野 陽一

スコットランド国際開発庁のデータ

名称：スコットランド国際開発庁
所在地：東京都千代田区一番町1
駐日英国大使館
メールアドレス：sdi-japan@scotent.co.uk
電話番号：03-5211-1310

